

あとがき

震災当初から当病院を外傷や疾病で受診された患者さんのカルテをデータ化し、その記録を活字にすることによってわれわれの経験を皆さんと共有したいと考えていましたが、ただいたずらに月日がたち、そろそろ震災から5年を迎えようとしています。

ここで改めて新たな視点で、医療の現場から5年を振り返って、震災時の医療活動を考えてみることにしました。5年たっても震災当初の被災された方々の一人一人の悲惨な姿は脳裏に残っています。その悲惨な姿を思うと、被災された方々をいかにしてより多く救うためにはこれからどうしたらよいのかという考えがいつもでてきます。これは行政など地域全体で考えなければならない問題でもあります。しかし、われわれ医療機関に勤務する者の立場からただ反省しているばかりでなく、われわれにもできる新たな方策を講じなければならないと考えました。その答えの一つとして、震災当初から懸案であった当病院の防災マニュアルを完成させることが考えられました。震災時の当病院における医療の現場での状況を改めて検証し、問題点を浮かび上がらせ、その結果を防災マニュアルに反映させることができないかと考えました。その考えをもとに編集作業を進めましたが、震災当時の当病院における医療の現場での状況や問題点は、言葉は足りないかもしれませんが、ある程度、活字にすることはできました。しかし、肝心の防災マニュアルは地震を想定した発災時が勤務時間外という限られた状況下での不完全な防災マニュアルにしかありませんでした。また、マニュアルとは言えないかもしれませんが、われわれの経験したことがただ、整理され羅列してあるだけでしかないかもしれません。しかし、皆さんから防災マニュアルについての問い合わせがよくありましたので、この本が少しでもその答えになっていれば幸いです。何かの機会に忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。

最後になりましたが、本誌の編集にあたり、当病院での震災時のさまざまなデータをよく収集、保存して頂いていた当病院元事務部長の志賀 進氏、出版に関して色々と専門的なアドバイスを頂いた日赤兵庫県支部の酒居昭夫氏、エディターの筒井亮子さんならびに、ご寄稿いただいた方々にお礼を申し上げますと共に出版にご協力賜わりました中外印刷株式会社高尾八洲雄氏に感謝の意を表したいと思います。

(沼田記)

編集委員

上林 恒夫 (院長)	三島 敦子 (看護部長)
津下 宏 (副院長)	福山 美恵子 (看護部長)
沼田 健之 (内科部長)	宮本 宜男 (会計課長)
伊藤 康夫 (整形外科部長)	